
契約のラヴェリタ

黒詠紅音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

契約のラヴェリタ

【Nコード】

N7339H

【作者名】

黒詠紅音

【あらすじ】

春休み終了直前、一人の男性が殺害された。世間一般的には普通に流される様な事件だったがその事件が対決への引き金となって！？対極の悪魔である二人の愉快でダークな疾走劇、ご堪能あれ！！
《毎週水曜日（土曜日）に更新予定》

March 21 AM 00:00

春休ミノ事ダ。

三月二十一日。今日デ私コト九条瀬名八忘却ノ竈ニ放り込マレ。

『死ンダ』

当たり前ノヨウニ

マルデ

最初カラ存在シナカタノ様ニ。

第一章《忘却ノ女王八呪イヲ詠ウ》

嗚呼、なんてことだろうか。

九条瀬名は住宅街の入り口付近で立ち止まり頭を抱えていた。

どうやら財布を落としてしまったらしい。

まずい、非常にまずい、バイト帰りで今月のバイト代を貰って自宅に帰る途中だというのに。

(アレが無いと俺の明日からの生活は一体どうなるんだよっ!?)

大声で叫びそうになり来た道に戻っていく。

あのバイト代は明日から一週間弱の生活費用の予定だった、それが無いという事は水を飲んで暮らせということになる、それだけは本当に勘弁してもらいたい。

一人暮らしの生活はキツイですよ。

……

残念ながらバイト代の入った茶封筒はどこにも落ちてなかった。もう誰かが拾って行ったのかもしれない、交番に行ってみるのも良いかもしれないが正直しんどい。

「どうすりゃいいんだよ、くそっ!!!」

コンクリートで出来た地面を殴り飛ばし皮が向け血が滲む。痛い。

明日からの生活代が無くなれば空腹のままバイトを行わなければならない、それもやっぱり正直しんどい。

「あー……どうすりゃいいんだよ」

悪態をつきその場で座り込む、親からの仕送りは今月いつ来るかわからない。

状況は至極絶望的なものだった。
家に残っている金は殆ど無い、もう絶望感しかない。

『どうかしましたか？』

ふと、俺に声がかかった。

透き通るような女性の声だった。

俺は振り向くと同時に絶句していた、その理由は女性の容姿が異常だったからだ。

ストリートヘアの黒髪は一本一本が黒曜石の様な輝きを放ち、肌は異常に白くてそれがまた綺麗だった。

が、俺はこれで興奮なんてしなかった。

俺と同じ年、多分高校生位の少女は魔的なまでの美しさを放っていたからだ。

その美しさは人間のものではなかった。

まるで世界を誘惑する悪魔の様な美しさ。

人間が触れる事が出来ない悪の女神、いや言葉では表しように無い妖艶さが纏わりつきその女性は立っていた。

黒曜石の瞳が俺を見つめている。

俺は何回か口をパクパクと開閉するのを繰り返し、やっと言葉を紡いだ。

「なんでもないです」

自分でも寒気がするほど平坦な声だった。

直後に悪寒が走り、壊れた様な笑みで微笑むとその場から離れていった。

『ねえ』

女性の声に俺はビクリと肩を震わせ振り返る、女性は紺色の皮の財布を右手で持っていた。

「あっ……」

俺の財布だ、と気づくと瀬名は一步前進していた。

「それどうしたんですか？」

先程までとは打って変わって明るい口調で話していた、ナイス臨機応変。

女性はニコリと冷やかな笑みを浮かべると『さつき道端に落ちていたんですよ』と呟き。

『これは貴方のですか？』

財布を瀬名に差し出し女性は問う、俺は「そうです」と明るく答えておいた。

5

『そうですか』

女性は悲しげに微笑む。

刹那、瀬名の視界は黒一食に埋め尽くされる。

.....

『昨夜、花財公園にて大学生の『九条瀬名』さんが遺体で発見され

ました、凶器は現場に落ちてはおらず、警察は 』

「へえ……物騒なもんだね」

俺はニユースを見て呟くと木製の椅子に座りカップの中に入った珈琲を一口飲んだ、舌で転がして苦味を覚えるとテーブルの上に置かれたシュガースティックを三本開封しドバドバと入れていく。

「ねえ、刹那はどう思う？」

俺は呟きコーヒーを飲む、まだ苦い。

シュガースティックを更に二本追加した。

「今の世界なんて物騒なことばかりだろうよ」

返答はソファから帰ってきた、立ち上がってソファを覗く、そこには少女が寝転がっていた、ゴスロリ調の世間から見たらイタ……では無く少々凄い服を着た少女の名は刹那、色素の薄い髪を振るい刹那がソファから起き上がった。

伸びをしてソファに深く座り込むと続ける。

「核兵器所有国だって馬鹿みたいに居るんだぞ？ 人間同士で殺しあう奴だって居るし、詐欺で人を騙す奴も居る、貪欲と憎悪が立ち込めるこの世の中を平和と言える奴なんて中々居ないと思うぞ？」

珍しく真面目な答えに俺は二ヘラと頬を緩ませて「少なくとも俺は平和だと思っよ？」と返す、刹那は不機嫌そうな顔をして「あんな」と呟く。

「お前は憎悪を込めて殺され掛けた事が無いからそんな事が言えるんだよ、もしそうなら……平和なんて単語人生の中で浮かばないぞ？」

「そーかい」

俺が適当にあしらうと少女の顔が沈んだ。

どうやら過去のトラウマ的な物が出てきたらしい。

気まづくなつて椅子に座ると「チン」と豪く間抜けな音が聞こえ

た、どうやら電子レンジに入れておいたピザが焼けたらしい。

「刹那ー、ピザいるかい？」

「いらない、脂っこい物は嫌いだからな、それより却、朝からそんなもの食べたら太るぞ？」

そーかい、ともう一度返して俺は台所へと入っていく。

デフォルメ熊が描かれた皿を取り出し電子レンジの中のピザを取り出す、うん、良い匂いだ。

俺の名前は『忘却』面倒くさいらしく刹那からは『却』と呼ばれている勿論本名ではないし本来『死神』である筈の俺達には名前なんて必要も無い。

「まあ、在った方が便利だけどね」

台所からリビングに戻り無言のままにピザを食べ終わる。

暫くソファでだらけて「あ」と呟いた。

面倒くさそうな声で（実際面倒くさいんだろうけど）刹那が「どうした？」と問うた。

「刹那、さっき朝からピザ食べたら太るって言ってたよね？」

刹那がソファから起き上がり不機嫌そうな顔をした。

「それがどうしたって言うんだ？」

「消化されるんじゃない？ 普通」

俺が笑顔で答えると刹那は溜息をついてソファに寝転がる、何だ、なんかしましたか？

「それに……俺はもっと早めに消化するよ」

「どう言う事だ？」

ソファから問われた。

俺はクローゼットを開いてパジャマから黒を基調とした黒のコー
トとズボンに着替えた、髪の毛まで黒いから黒一色だ。

「今から事件現場に行くからだよ、一緒に行く？」

返事は無かった。

俺は苦笑すると事務所のドアを開き階段を降りて事件現場へ向か
った

March 21 AM00:00 (後書き)

閲覧ありがとうございます、魔逆狼です

あらすじで書いた時点で何となく把握したと思いますが…

おそらく瀬名君主人公じゃないです(え)

まだ最初ですがなるべく更新していきたいなー、とか思っています
ので応援宜しくお願いします。

作業用BGM

UVERworld GO・ON

及び過去のアルバムなど

March 22 AM 08:20

事務所から事件現場の公園までは然程遠くは無かった、交差点を進んで直線に進んで更に曲がると着いてしまふ、時間的には約五分弱。

公園の近くまで行くと人だかりが出来ていた、流石に人が死んだとなれば当たり前前の事なのだが。

「これは面倒くさそうだなあー……」

ぼやいて遠くの方のベンチに座る。

俺は遺体がどうかと言うより事件現場がどんな感じだったかと言う事を知りたいだけなので後から調べてもそこまで関係無かったりする。

(こんな事なら家に帰ってニュースでも見てたら良かったかな、何か朝のニュースにロックバンドのレイトンが出演するらしいし、地味にファン何だよね……)

溜息をついて足を組んで木製のベンチに深く座り込む。

春直前の今宵だがやはり寒い、コートを着て置いてよかったかもしれない。

(年中コート着てる奴が言う台詞じゃないけどね)

思わず自重してコートの内ポケットから財布を取り出して中身を確認する、残金二百二十五円。

そういえばまだ刹那から給料を貰っていないような気がする。

「今月は事件を二、三件解決したから給料ぐらいは支払われると思うんだけどなー……もしかして刹那またウィジャ盤とか棺とか危ないオカルトグッズ買ったのかな、マズいなー、流石に今月給料が無いと死にそうなんだけど」

一人でボソボソと呟き頭を掻き篦る、今月及び来月の生活を給料無しで演算した結果、思いの他早めに餓死する事が決定した。さよなら俺の青春。

と、くだらない考えを頭の中で繰り広げていると俺の影が誰かと交差した。

ふと横を見る。

そこにはオレンジ色の髪をした少女が立っていた、春休みなのに学生服を着ているのが少し気になったが俺の思考を無視して少女は、

「隣、良いですか？」

と聞いてきた。

「別に良いよ？」

俺は真顔で答える、断る理由が無い。

ベンチの端から中央に移動し少女に座る様に促す、少女は素直に座った。

暫く沈黙が続いた。

俺は特に語る事は無かったし少女も語るつもりも無いらしい、只ちよこんとベンチに座っているだけだった。

「逆ナン？」

俺は沈黙を殺す為の第一声を放った。

少女は一瞬キョトンとした顔に（イヤ真面目に）なりやがて耳まで真赤にさせると「違いますっ！！」と慌てて叫んだ。

声が聞こえたらしく事件現場に居た野次馬が此方を振り向いた、少女の顔が更に赤くなる。

俺はそんな事を取り合えず無視して続ける。

「そうだよ、こんな朝から逆ナン何て流石にビックリしちゃうよ、逆ナンするならなるべく夕方から夜を推奨するよ、うん」

「何でそんな話になるんですか！？」

少女の必死の問いにも俺は真顔で、

「じゃあ他に何か理由が在るのかい？」

そう問うた。

少女は口籠り、口を開いた。

「へえ……じゃあ、君は浪野飛鳥ちゃんなみのあすかで名前で殺害された九条瀬名君とは幼馴染だったと」

俺の問いに少女はコクンと頷く。

復唱したとおりこの子は九条瀬名の幼馴染で同じ大学に通っていたと言っ。

（やつぱりねー……流石に名門校の女の子が俺に声を掛けてくれるわけもないもんねー）

そう思うと思いの他泣けてきた。

まあ、それはよしとして。

「何で俺の事がわかったのかな？」

当たり前の事実だ、態々俺を訪ねる奴は仕事を依頼しに来る奴かイカれた馬鹿だけだ。

俺の冷ややかな問いに飛鳥はビクリと肩を震わせて、静かに口を開いた。

「インターネットで黒一色の服を着た二十代位の男性が願いを叶えてくれる、とか聞いたので……」

「それ信じたの？」

飛鳥はコクリと頷く。

これは相当追い詰められて信じたか夢見がちの馬鹿だから信じたのか良く解らなかった、おそらく前者なのだろうけど。

「ふうん……で、俺にどうして欲しいの？」

飛鳥は顔を上げて真剣な眼差しで、けど動揺を隠せない瞳で答えた。

「犯人を……殺してください」

その答えに俺は微笑を浮かべると辺りを見回すワザとらしい動作をして

「俺の事務所に来る？ 詳しい話を聞きたいんだけど」

飛鳥はコクリと頷いた。

面倒くさそうな事件に巻き込まれたらしい。

そう気づくには少し遅かったかもしれない。

事務所に帰ると不機嫌そうな面をした刹那が明るく（決してそうではないけども）出迎えてくれた。

残念ながらその明るい笑顔が悪意無き笑顔だったら良かったんだけど完全に悪意しか無い笑顔だった、感覚的に言えば心臓を鷲掴みにされたような感じだぜっ

……コホン。

「刹那ちゃん、仕事だ」

「黙れ、今私は極限に眠い、仕事は全て最初から最後までお前に任せて私は正々堂々寝る」

「えー……昨日散々寝たんじゃないのー？　つか俺はアレですよ？　ガチで寝不足でテレッテーですよ？」

「私を説教するつもりかどうかは知らないがその前にお前自身のその支離滅裂すぎる言語何とかしたらどうだ？　何なら私が教えてあげましょうか？」

「最後の時だけ女の子っぽい喋り方になってるんじゃないですよっ！！！」

「黙れ、死ね」

「それ女の子が言う言葉じゃないよねっ！？」

「黙れ、死ね」

「いや二回連続でそれは無いよね！？　ライトノベルでも二回連続で死ねって言われる主人公って多分現在進行形で俺ぐらいだと思っよ？」

「何を勘違いしている？　これライトノベルじゃなくてネットノベルだ」

「知らないよ、って言うかむしろどっちでもいいっ!!」

ダメだ、これはマズイ、半永久的に罵詈雑言の会話が続きそうな気がする、これじゃダメだ、前途多難だ無限ループだ無限1UPだ!!

「あ、あのー……」

そこで飛鳥が口を開いた。

何と云うか凄く申し訳無さそうな表情だった、申し訳ないのは普通にこっちなのに。

と、色々あって結局刹那と一緒に（テラ不機嫌だけど）依頼者の飛鳥の話聞く事になった。隣に座っている刹那の殺気が超怖い。

「それで、何から説明してくれる？」

俺は膝の上で手を組んで笑顔で言った。

「え？」

「いや、物には順序つてものがあるじゃん、いったいどこら辺から……例えばそう、君と九条瀬名は幼馴染であり親友だった……そうだろ？」

飛鳥が頷く。

「だから彼について教えられる事は全て教えて欲しいんだよ、住所とか年齢とか電話番号とかね、あ、悪用はしないからね俺はプライドと誇りだけは超一流だから」

隣に座る刹那の「嘘つけ」と言った声を完全に無視して俺は続けていく。

「後他にもそうだな、友人関係とかそう言うのも教えて欲しい、その方が解りやすいしね」

俺のふとした言葉に飛鳥はビクリと肩を震わせる。

瞳を細めて慎重に言葉を紡いでいく。

「言いたくないのかい？」

飛鳥は俯いたまま答えない。

「それならそれで別に良いさ、こっちはこっちで適当に調べておくから、でも結構情報って重要だよ？」

俺の言葉に飛鳥が顔を上げる、俺は『おそらく』優しい笑みで続ける。

「生憎だけど証拠も情報もないと大変なんだ、警察だって指紋も凶器も絞殺の後も傷一つ無く殺された遺体を見たら少しお手上げなんだよ、だがまだ諦めては居ない、まだ諦めては、一応ね」

『一応』の部分強調させて俺は目を瞑り続ける。

「で、最終的には不完全なまま事件当日から時が過ぎていつて最終的には時効になるんだよ、最近だと時効日時も若干減ったみたいだからこの事件も結構早めに暗闇の中に放り込まれて二度と戻ってこない」

目を開けた時飛鳥は青ざめた顔のままだった。

何となく予想はしていたけどここまでリアクションがでかいとちよつとショックだ。

「その……私が持っている情報を話せば……何とかなるんですか？」俺は少し戸惑った。

いくら情報があったとしても必ず解決する訳ではない、情報が沢山あっても解決しなかった事件は腐るほどある。

それは、と俺が告げようとした時、横に座っていた刹那が黒二丁ソを履いた足を組み胸の前で腕を組み、言った。

「生憎だが、出来るから私たちは事務所をやっている、どうする？」

このまま帰るか？」

最強装備「コスト」を着た女の子が言う台詞ではない気がする、まあ逆にこれで彼女が話してくれる気になるなら別にいいんだけど。

ふと片目を閉じて飛鳥を見る、飛鳥は震える唇で。
「わかりました……話します」

そう、言った。

色々あったけど結果オーライ。

それは一昨年の十月の秋だった、まだ少し夏の暑さが残っていたが間違いなく秋だった。

世間的には受験手前のクライマックスシーズン（約四ヶ月弱）に入るのが普通だったが私こと浪野飛鳥は大学に進学することも無く普通に働こうと思っていたので周りの状況に流されることも無くのんびりとした無気力時間スロライフを送っていた。

大学に行ってもやる事は高校と同じだろうし目指す事も無い、むしろ学校と言う名の苦痛から逃れたいほどだった。

そんな時だった、彼が来たのは。

「あー……まだ大丈夫か？」

茶髪のボサボサの髪に黒の制服、どうみてもこの高校の男性だ。

（ああ、何だ）

そう、九条瀬名だ。

一見ふざけている様にも見えて正義感が熱く人徳もある彼はクラスでも慕われる存在だった、噂では他校の生徒にカツアゲされている生徒を助けるために集団に対して単身で突っ込んだこともあったらしい。

「……ゴメン、ちょっといいかな？」

俺は色々あつて止めてみる、正直止めておきたい。

当の本人はキョトンとした顔をしていたがやがて怪訝そうな顔を浮かべて。

「なんですか？」

「それはこっちの台詞だ、戯け」

俺が何か喋るより刹那が口を開いた、言葉のトーンとかを聞くと若干苛々しているようだった。

俺は決意をすると音速のスピードで台所へ向かって走っていく、怖い。

（刹那があーなると結構怖いからな……なるべく関わりたくなかったりそうでも無かったり、ああでも怒ってる刹那も可愛いよ、俺大好きだよ、本人の前で言う間違いなくフルボッコだけど）
予め用意しておいた紅茶を淹れて盆に乗せる、シュガースティックを数本摘み更にスプーンも付け足す、緊張している時には紅茶が一番だ。普通に落ち着ける。

別に依頼主の飛鳥の意見を却下したのはそういう理由ではない。

あくまでベタな恋愛話を聞きたいのではなく事件の証拠になるような事を聞きたいのである惚気話は本当にどうでもいい。

「あのお……やっぱり、そうしよう」

刹那はソファに寝転がるとニーソックスを履いた脚を組んで、ふんと鼻を鳴らした。

「事件に関連性のある事だけを言ってくれ、私はコイツ（忘却）の話と長話と辛い物が大嫌いだからな」

「何言ってるんだ、毎回ウツトリしながら聞いているじゃないか」

「黙れっ！！ お前の目は節穴かっ！？」

「なっ……俺の視力は3.5ですよ？」

「視力の問題じゃない、お前の人間性の問題だ」

「酷い！ 責任者を出せ！ 色々言ってる」

「私が紅魔術事務所の所長こと刹那だ、文句があるなら言ってみるがよろしいよ」

刹那が無い胸を張って踏ん反り返る、もう何か色々嫌だ。

「あ、あのお……」

飛鳥が至極申し訳無さそうな顔をしていた、本当に申し訳ないのは

俺達のはずなのに。

「話してもらっても良いかな？」

俺の声に飛鳥は頷く、良い子だ……いや、早く事件を解決してほしいと言っただけなのかも知れないが。

数分ほどして九条神弥の素性と殺害までの一週間の過程が解った。

まず、九条瀬名は大学に進学してからも恨まれる事は無かったらしい、人柄も良かったせいかわゆる慕われる人間だった。

クラスからの殺人は薄くまたトラブルその他も無かったらしい。そう考えると殺人の可能性は若干ながら薄れた。

「いやーそれにしても」

顎に手を当てて俺は呟く。

「まさか君が九条君と共に大学へ進学するとは予想外だった」

そう、飛鳥は九条瀬名と共に大学へ進学していた、理由は彼と幼馴染であるのは勿論、惚れたらしい、合格し卒業すると同時に告白し付き合うことになったそうだ。

その事実には飛鳥は頬を朱色に染めていた。

「いや、良いんだよ。恋愛とは良い事だ、恋心を持つということは優しさを持つ事と同じだよ」

俺はフォローを入れておく、普通に事実だ。

「それで……その九条とか言う奴は恨まれるような事はしてなかったんだな？」

ソファに寝転がったままの刹那が問う。

「はい……その通りです」

「本当だな？」

刹那の声が低くなる。

「本当ですっ！！ 瀬名はそんなヤツじゃっ……………」

飛鳥が立ち上がり叫んだが、すぐにソファに座る。「すみません」と
呟き俺は無言で苦笑する。

「ふむ………… そうだな、また明日来い」
不意に刹那がそう呟いた。

「今のお前じゃ詳しい事まではわからないしな、一旦落ち着いて来
る方が………… まあ効率はいいだろうし」

その一言で今回の事情聴取は終わった。

March 22 AM 08:48 (後書き)

京都に旅行に行っていました。

うん、良いですよ、旅行。

清水寺に入れなかったことを地味に後悔してますが(爆

「ところで刹那」

「あ？」

何で最近の刹那が此処まで不機嫌な理由が良く解らない、返事がせめて「何？」とかなら構わないのだが「あ？」とかだと怒っているようにも聞こえて本当に怖い。

当の本人はソファに寝転がり旧式のテレビを見ていた、今も九条瀬名の殺人事件の報道が流れている。

「お昼ご飯を買いに行きませんか？」

思わず敬語になってしまった、これじゃ悲劇の召使&魔王的な主人の構図が出来上がってしまうっ！！ どうする、どうするんだ俺っ！！

俺の手札は《逃げ出す》《物凄いスピードで逃げ出す》《音速の速度で逃げ出す》《初めての土下座》の4枚、対して刹那の手札は

《憤怒》1枚+17枚（見た限りだが）勝てる訳が無い。

お前ら知ってるか？ 手札がそんなだけあればな、瞬間殺人も出来たり出来なかつたりするんだよ、ワンターンキルの元ネタ解った人はコメント宜しく、作者喜ぶから！

そして刹那の周りのカードがギョルギョルと回転し（幻想だけど）カードを1枚取り出す（幻想だけど）

例えるならば……

『俺のターン！！』（幻想だけど）

「よし、買いに行こう」

「は？」

俺はキョトンとしたまま動けなかった、何となく断れる事を予想していた俺には意外な言葉だったらしい、刹那は相変わらず不機嫌そうな顔で。

「お前の耳と脳の間には真空が出来てるのは知っているがそこまで酷いとはな……もう一度言う、買いに行こう」

「え、何を？」

「何って昼飯の材料だろ？」

キョトン顔で返された、いや当然の反応なのかもしれないのだが。何故刹那がこうもすんなりと着いてきてくれる理由が普通に解らないのだが別に良い、断られるよりは遥かにマシだ。

「あ、却」

財布を取ろうとして不意に名前を呼ばれる。顔を上げると刹那は頬を朱に染めてボソボソと

「今日の昼飯はオムライスが良い、お前の作るオムライスはまあまあ美味だからな」

か……可愛すぎる。

ツンデレが可愛いのは何となく知っていたのだが此処まで破壊力があるとは知らなかった、恥じらいと本音を隠した言葉に俺は鼻血を吹いて倒れそうになった。

「よしっ！！ 刹那、今日は俺がシェフも真つ青のオムライスを作つてやるからな！！ 楽しみにしているがいいわッ！！」

「え……ああ、喰えるのだったら何でもいいから無理はするなよ？」
「優しさによるカウンターの一撃を喰らい俺は戦闘不能ノックダウンしそうになった、むしろした。

コイツには極上のオムライスを作ろう、そう思った。

この小説ってこんなギャグチックでしたっけ？

眞実は闇の中。

路地裏に一人の青年が倒れていた。

青年？

違った。

それはただの肉片だった。

そして人間だったものだ。

原型を止めないレベルで破壊された青年は内臓を撒き散らし死んでいた。

『嗚呼………』

その横には一人の少女が立っていた。

白い純白のドレスには返り血と肉片がこびり付き病的なまでに白い肌にも返り血が付いていた。

『これで………良いの』

頬の血肉を拭い舌で舐める、血生臭い匂いと鉄臭い味が下を刺激する。

やがて、彼女はその肉片を『飲み込んだ』

くちやり、くちやり、と粗食し、飲み込む。

『嗚呼………美味しい………』

彼女は目を細めて極めて優しい笑みを浮かべる。

周りの光景さえなければ美しき光景だった。

だが血黙りに沈んでいた彼女は完全に『狂っていた』

異端だった。

March 22 AM 08:58 (後書き)

はいー…ツンデレですね、ツンデレ&優しい刹那、悶絶する忘却、
そして俺のターン。
ゴメン遊び過ぎたw

後半のグロシーン何ですが気分の害された方はすいません…今後も
あの様な描写が地味に出てきます。

それは幻想ではなく現実だ、憎悪では無く間違いなく現実だった。

第二章《空ノ魔女ト審判者》

其処には魔女が居た。

魔女、と言えば悪い印象が出るかもしれないがそれは偏見だった。

彼女、魔女は人々の願いを叶えていた。

病気のも物が居れば薬を与えてやり。

金の無き貧しき者には金をやり仕事も与えた。

まるで聖職のようだった。

が、その魔女は姿を消した。

一瞬にして行方を晦ました魔女に人々は悲しみを隠す事が出来なかった。

ある者は泣いた。

ある者は怒った。

ある者は死んだ。

ある者は消えた。

ある者は探した。

誰を？

野暮な事を聞くものではない。

決まってるじゃないか。

彼女を探すために、さ。

「お前……こんな時間から昼飯買いに行く理由は此処の為だったのか……早く気づくべきだった」

刹那が呆れた様に呟きこめかみを押さえる。

此処は廃ビルの二階だった、勿論人が住める場所じゃない。

別にそこまで大袈裟なリアクションをされる様な事をした覚えは無いが、まあ一応罪悪感を心の奥にしまっておこう。

「だって情報を求めるには苦楽くらくに頼るのが一番だろ？ その方がよほど効率的だしね」

俺はそう吐き捨てるのとチャイムを鳴らす。

ピンポン、そう何処か間抜けな音が聞こえる。

返事は無い。

もう一度チャイムを鳴らす。

返事は無い。

刹那が愉快そうに顔を歪ませる。

「諦める、苦楽は居ない様だ……それよりオムライスを買に行こうっ！」

刹那が顔を輝かせて叫ぶのを無視したい所だが刹那の言うとおり出直したほうがいいかもしれない、後回しにしてもいいかもな。

と、俺が諦めて扉から遠ざかろうとした時。

ガチャ、と金属質の扉が開いた。

「朝っぱらから誰だ……何だ、お前達か」

そこには例えるなら完全に魔女の様な女性が居た。

黒い上質の喪服のような物を着た女性は此方をジロリと一瞥するとそんな言葉を吐き出した、オレンジ色の髪が揺れる。

この年増……いやいや女性の名は苦楽^{くらく}。

今回物凄くお世話になるだろう人で、悪魔だ。

「まあ……面倒だが入れ、珈琲位は淹れてやる」^{コーヒー}

その言葉に甘えて入る事にした、背後で刹那の憎悪を込めた舌打ちが聞こえた気がしたが今は無視。

玄関で革靴を脱いで部屋に上がる、部屋？ いや、そこは魔窟だった。

まず踏める床が無い、服の他にも何だろう、ウィジャ盤って言うんだろうか、そんな古代神器^{オーバート}見たいなのがゴロゴロ置いてある。

壁際には分厚い本が散乱していて本人のだらしなさが伺える。

何と言うかその心の中で俺の理性が「KEEP OUT!」とか何とか連呼してる、大丈夫だもう一人の俺、俺も同じ気持ちだから苦楽は部屋の中央にある火燵^{こたつ}に入ると「お前らも座れ」と促してくる、素直に頷くしかない火燵に入る、電気はついてない。

(いや、それ以前に何で火燵しまつてないんだ)

と刹那にアイコンタクトを飛ばす、返答は(知るか)だった、俺も同意権で返したい。

「それで……今回は何の用事だ？ 報酬さえあればなんでも調べあげないことも無い」

「どつちだよ」

と俺はぼやき財布の中身を確認する。

「あ……金は冗談だよ、この前の件もあるから無料で良い、その代わり貸し借りはチャラだ」

ニヤリと妖艶に微笑み苦楽が言った。

俺達は去年の冬、彼女を助ける為に誘拐犯^{タチのわるいあぐま}と激突した、死闘の末に苦楽を取り戻した俺はその事をすっかり忘れていた。

「で、何が欲しい？」

もう一度妖艶に微笑んだ苦楽を見て俺は頭痛を抑える事が出来なかった。

何と言っかこの人は苦手だ。

M a r c h 2 2 A M 0 9 : 2 1 (後書き)

最近執筆が好調だったりするw

あー…課題が終わってない(爆死

皆は俺みたいになるなよっミ (あ

苦楽くらくに説明する様に促がされたので大人しく話す事にした、何と云うか話す方が良いと思われる。

「じゃあ苦楽」

「苦楽さんと呼べ苦楽さんと」

メンドくさっ！！ と言いかけたが何とか堪える、此処でそんな事を言えば水の泡、ウォーターハザードだ。

「えー……じゃあ苦楽さん？」

「苦楽様と呼べ苦楽様と」

「メンドくせえよ！！」

本当に面倒臭いので叫んでおく、顔とか綺麗だからまだ許せる、声だつてアレだよ、綺麗だよ、ガチアニメ声だよ。

深夜アニメ代の話だが。

そして苦楽はあろう事かケタケタと笑い出しやがった、鬱陶しい。

「いやー……アレだな、忘却はからかいがあるからな、中々楽しいんだよ」

と言って机の上に置かれた黒い扇子を取り出し俺達に向かってバツサバツサと扇ぐ、意味が解らない、甘ったるい匂いが鼻につく。

「嫌がらせか？ 本当に腹立たしいぞ？」

痺れを切らしたのか刹那が眉を顰めて呟く、苦楽は刹那を一瞥するとニヤリと笑う。

「嫌がらせ、というよりただ楽しいだけじゃよ、私は普段陰気な奴らとしか情報交換をせんからな、お前達のような個性的な奴らと話をするのは楽しい」

「一番個性的な奴が言う台詞じゃないだろ」

「えー……刹那……私は普通だぞ？ 平凡でピッチピチの十八歳じゃよ」

「十八歳!？」

「忘却、少しはツッコミの精神と言つ物を解れ」

「冗談かよ」

「当たり前だろ、却、こんな年増が」

「年増？（ピキッ）」

「あ、何でもない」

「宜しい（ニコ）」

怖い、怖いよ苦楽さん、まるで大魔王と決戦してるような空気なんだけど。

「って言うかいい加減話を戻してもいいですか？」

話がかかり脱線している事に気づいて俺は言った。

「断る」

「何でだよっ！！」

「さつきも言っただろう、私はお前らともつと話したいのだが……無理か？」

「無理だよ、早めに切り上げないとオムライス待ちの刹那が俺の頭をムシャムシャと」

「インデックス禁書目録みたいなのシチュエーションよね？ 萌えるわ」

「萌えんでいいっ！！ 俺は『とドラ！』とか『ときメモ』とかほのぼのした恋愛物が良いっ！！」

「そんな君に『スクールデズ』萌えるぞ？」

「萌えねえよ！！ 色々怖いわっ！！ ヤンデレゲーとか怖いわっ！！」

「ワガママだなお前は…… ブーチとかワピースとかはどうだ？」

「何でそっちのジャンルに走るんだよっ！！ 恋愛物関係ねえっ！！」

「はじんげんそつ卍解ッ！！『霸神幻想』！！」

「何でそれっぽいんだよっ！！ 普通に少年漫画っぽいじゃねえか！！」

「私がブリチをどれだけ読んでると思ってるんだ？」

「知るかよ、ってかこんなギャグムードじゃなかっただろっ！！」

読者の方はとりあえず『シリアスムードだよな』って思ってる気がする、そんな気がする」

「私がこの世界に存在する限りシリアスムードは芽生えない、その前に咬み殺す」

「今度はリボー　ネタかよっ！！　×バーナー喰らわしてやるうかつ！！」

直後、俺の視界が暗転。

まさか本気で必殺技を喰らったのかと思っただが違っらしい。

それは刹那の華麗なる手刀アタックだったらしい

主人公の扱いとしてこれはどうなのだろうか。

謎だ。

ふと目が覚めた。

目が覚めたというより、体に重みが掛かった結果、起こされた、と言った感じだ。

「ふえ？」

自分でも随分間抜けな声を出した気がする、重みと熱が相まってどつと汗が噴く。

「……………」

そこには、

苦楽さんが俺の上に乗っていた、丁度馬乗りになる体勢で。

「は？」

視界が鮮明になり意識が戻る、嗚呼俺の顔の隣には綺麗な顔をした……苦楽さんが居た、居てしまった。

沈黙。

沈黙。

微笑。

微笑。

焦燥。

焦燥。

いや、可笑しい、

普通に考えて。

「可笑しすぎるだろうがっ！！」

「きゃっ！！」

俺が何か力一杯立ち上がると、乙女らしい声を出して床に倒れた、その……普通に書いてはいけない格好（そういう意味ではなく）の苦楽さんが上目遣いで俺を見ていた。

「何してるんですか？」

「私は欲求不満だからな、ちょっと解消させてもらった」

「マテコラッ！！ 嗚呼、何か部屋が書いたら18禁レベルになりそうな感じになってるぞ！？」

「いやー……激しかったよ、思わず喘いだり叫んだりしたからお隣さんに明日気まずい目で見られるかもな」

「黙れ、お前もつ黙れッ！！ しかも廃ビルにお隣さんとか居るかっ」

「良いではないか、お前の童貞を奪ったのも私なのだから私がお前

をどう扱おうと別に構わないだろう?」

「関係あるわっ!! 何だろう、アレだな、少なくともこの『小説家になるう』とかではやってはいけない事な気がするッ!!」

「大丈夫、愛はサイトのルールをも打破する、と言う訳で続きと行こうか」

「どう言う訳だよッ!? つか触るなっ!! ちよっ…あっ…!?!」

「可愛いなあ…忘却?」

「そんな目で俺を見るなあっ!!」

「……………」
ゼエゼエと息を吐きながら俺は床に突っ伏す。

皆、俺は取り合えず主人公としての地位的な物は守りきったぞ!!

その、アレだ、犯されなかった。

「いやー…更に激しかったな、やっぱりアレか? 溜まってたのか?」

「ちよつと待て、今さっき自分の体を守りきったって一人称の主人公として地の文に書いたからもうお前は誤解を招くような事を喋るな阿呆ッ!!」

「本当の事だろう? お前の童貞を奪った時とかはそのアレだな…
…今思い出すだけでもゾクゾクする」

「黙れよ変態ッ!! お前はもう喋るなッ!! 地獄の釜で大王に料理されて死んでしまえよっ!!」

「料理とか…忘却、お前…: やっぱ溜まってたんだな」

「そう言う意味じゃねええええええええええっ!!」

絶叫ドストライク、残念だが何か色々小説の内容が捻じ曲げられそうなので強制終了、何とかかんとか。

ちなみに契約のラヴェリタのジャンルは《ダークファンタジー&mp;バトル&mp;その他諸々》なので、官能小説とかでは勿

論無いので。

暫く論争を繰り広げて取り合えず打ち負かされたので俺はコートを着た。

そしてある事に気づく。

「刹那は？」

「嗚呼、刹那なら忘却が寝てから何処かへ行ったぞ？ 確か……」
何か掴んだから行くよ、却には先に帰れと言って置いてくれ」と言
つてたわね」

喉が干上がった。

「ちよつと待て！！ 一人で出て行ったのか！？」

苦楽はキョトンとした顔で「どうした？」と呟く、俺は焦りでコ
トを着るのを一回失敗して再び着なおす。

そして叫ぶ。

「アイツ、事務所までのルート知らないんだぞ！？」

「は？ じゃあお前らどうやって？」

「空間転移ステレシオン使ったに決まってるじゃねえか！！」

「それなら空間転移ステレシオンを使えば良いではないか」

「アイツは空間転移ステレシオンを発動できないんだよっ！！」

俺はドアを開けて階段を下っていく。

「忘却ー」

遠くから苦楽の声が聞こえる。

「何だよッ！！」

「溜まつてるならまた来いよ？」

「二度と来るかっ！！」

そう叫び返して階段を降りて大通りへと走った。

March 22 AM10:05 (後書き)

ゴメンナサイギャグ要素に走りすぎましたw

本当にゴメンなさいwwwwww

苦楽サン……何でしょうね、アレw

番外編

とりあえずCVキャラクターボイスを妄想で

忘却 (福山潤)

刹那 (釘宮理恵)

苦楽 (坂本真綾)

…何か激しくゴメンナサイw

ペルソナ3がPSPで出るみたいなんでマジ欲しい (爆死)

March 22 AM 13:11

過去の事である。

一人の断罪者がそこには居ました。

断罪者と言うのは文字通り罪を裁く事の事を表し、男もまたその一人でした。

しかし断罪者はとある事件により落ちぶれて路頭に迷う毎日を繰り返していました。

変わらない毎日、変わらない世界。

繰り返される日常、繰り返すことしか出来ない日常。

それに男は絶望していました。

しかしそこに一人の人物が現れます。

その人は断罪者に一言告げました。

「

その断罪者がどうなったか、真実は永久の闇の中。

.....

廃ビルから出て暗い路地裏を一気に突っ走る。

迂闊だった。

まさかこんな事態になるうとは登場人物及び読者、さらには作者も予想できたであろうか？ ……できてない気がする。

残念ながら彼女は携帯を所持していない。

彼女が行きそうな場所なんて全く知らない。

ふと立ち止まり空を見上げる、鉛色の空がこの世界を覆い尽くそうとしていた。

「何でこんな事になったんだっけ」

ぼやく。

あ。

良く考えたら俺を気絶させた原因は刹那の音速チョップだった様な気がする、今更気づくのはどうかと思うが。

(くそッ、尚更探さなきゃいけねえじゃねえか！！)

頭を掻き耄り路地裏をダッシュ。

同時に携帯電話の軽快な着信メモロディが鳴り響く。舌打ちをして携帯を取る、見知らぬ電話番号だった。

「もしもし、面倒臭いんで用件は手短に」

『何だそのぶつきら棒な言い草は、もしもし位言えないのか？』

「苦楽か、俺は呼吸するのに忙しい、後トラウマが蘇りそうで怖いから電話を切りたいんですが」

電話主は俺の言うとおりで苦楽だった、俺の返答にケタケタと笑っている。

「切つていいか？ 刹那が何となく危険な予感がするんだ」

『お前は借金執事か？ もしくは親だな、テラ親子、髪の色が違うのが非常に残念だ』

「ツツコミの必要性は無さそうだから止めておくけどコレだけは言うておこう、俺は今回シリアスに徹したい& a m p ;本気で忙しい」

『まあ待て、これはお前達にとってはおそらく重要だぞ？』

俺は足を止めて廃ビルの方を振り返る。

『九条瀬名殺人事件の手がかりが欲しいんだろう？ 一応知ってる物は言っておこう、あ、帰ってこなくていい、お前がこのビルに一旦戻ろうと振り返って此処を見た事は把握したから』
「どこで見てる？」
俺の低い声での問いに苦楽はケラケラと笑い出した、不愉快だ。そして冷徹なる声でこう返してきた。

「戯^{たわ}け、私は『魔女』だぞ？」

空白がそこには在った。

私は一瞬世界が空白になった気がした。

さっき殺した男の肉片から目を離し路地裏を見回す。
暗くて湿った路地裏だった、時々悪臭がして気分が悪くなる。
血塗れの自分の格好を見て思わず笑みが零れる。

「嗚呼……」

「これで良かった」

「これで私は幸せになれる」

「もう二度とあの人を奪いたくない」

「奪われたくない……」

「だから、」

『だから殺したのか？』

肩がビクリと震え上がりゆっくりと後ろを見る、そこにはゴシック
ロリータ……つまりゴスロリを着た少女が立っていた。

私は血塗れの白ローブを着た少女を一瞥するとその傍らに放置され
た肉塊を見る、肉と血で描かれた血肉を見て気分が悪くなる。
そして私は問う。

「だから、殺したのか？」

自分でも驚くほどに平坦な、感情の籠っていない声だった。
女性はキョトンとした顔をしたままだった。

苛々する。

胸の奥で泥の様な嫌悪感が湧き上がりそうになったが無理に沈める。
やがて血塗れの少女が口を開いた。

「貴方……誰……？ 何でこんな所に居るの……？」

少女は何も知らない。

この状況を知り決定権を握んでいるのはこの状況で私だけだ、無理
も無い。

「私の問いに答えるよ、お前が殺したのか？」

嫌悪感と苛立ちを込めて再び問う、また少女の肩が震える、何だが
私が一字喋る度に震えてる気がする、いい気はしない。

少女の眼球は焦点が合わない様な感じで忙しく動いていた。
やがて震える唇で言葉を紡ぐ。

「わ、わた……私は何も、何、も知らない……」

「なら、その肉塊は何だ？」

少女がハツとして自分の隣に転がっていた血塗れの肉塊を凝視する、直後、彼女の体がビクリと痙攣し『吐いた』。嘔吐した物が肉塊の上に降り積もる。

「私……何も知らない……何も」

「ならこれだけには答える、お前は……誰だ？」

その言葉に少女は答えなかった、嘔吐し体全体をビクビクと痙攣させ息を切らしながら私を見つめる、私はそれを腫物を見る様な目で見下していた。

言葉を紡ぐ。

「お前は……誰だ？」

その問いに彼女は蹲り頭を抑える、そして。

殺意を込めた目で彼女を見ると同時、『跳んだ』。

(は……?)

直後、腹に鈍痛。

見ると自分の腹に小さな穴が空いていた、そこから空気でも抜けるように鮮血が溢れ出る。

苦痛に顔を歪める。

目の前には少女が立っていた。

少女は汗まみれの顔で唇が裂けるのではないかと言うレベルで笑っていた。

苦痛に意識が遠のきそうになる。

成る程、コイツは明確なる『殺人鬼』だった。

(終わるな……)

第二激目を発動せんと少女が動く。
この時点で終わりを予感していた。
が、

直後路地裏に声が響き渡る。

「刹那!!」

聞き慣れた声だった。

M a r c h 2 2 A M 1 3 : 1 1 (後書き)

何と云うかバトル偏に突入。

そして初の刹那ちゃん視点w

で、問題が一つ、この小説かなり長くなるかもしれない可能性が
覚。

読者が着いて行けるかどうか激しく不安。

「教える、苦樂、アンタは一体何を知っっているんだ」

『苦樂さん……だろ?』

軽快な声が耳に障る、何と云うか果てしなく苛々する、胸の奥で憎悪と苛立ちがグツグツと煮えていた。

『まあ、冗談はそこまでにして……だな、そうだな、とりあえず刹那の所へ急いで向かってみたら良いと思うぞ?』

「現在進行形でそうしてるじゃねえかつ!」
と、そこでふと立ち止まる。

「ちよつと待て……急いで向かえ」ってどう言う事だ? その言い方だとまるで……」

心臓の音が五月蠅い。

呼吸の音も荒すぎる。

脳の回転が減速する。

冷静なれ、刹那自身。

刹那はどこへ行つた。

何をしに何処へ行つた。

何の為に出た。

地図も無いのに何故外へ出た。

住所も解らない筈なのに何故俺を置いて出た。

何故?

『拍子抜けだな、忘却』

冷やかな苦樂の声が電話越しに聞こえる、まるで此方の意思と思考を読み切つたような言い草だった。

『そこまで頭の回転が悪すぎる悪魔が事務所まで開けるとは世の中も変わってきたな』

俺はその言葉を聞いた瞬間電話を切った、これは、不味い。

これはマズい。

プー、プー。

電子音だけが部屋の中で鳴り響いていた。

どうやら電話を切られたらしい。

「まったく、せっかちな奴だな」

苦笑を浮かべて携帯を机の上に置く、そして振り返る。

「何か言いたそうな顔をしているな？」

苦楽の前には一人の女性が立っていた、苦楽とは対照的に白い着物を着た少女は黒曜石の様に黒い瞳で苦楽を捉える。

「……………貴女は、樂觀的過ぎる気がする」

少女の言葉に苦楽は薄い笑みを浮かべて扇子を開く、甘ったるい匂いが室内に籠る。

「人生、樂觀的に生きれば良いんだよ……………伯楽、アンタももう少し気楽に生きれば？」

苦楽の言葉に伯楽と呼ばれる少女は少し間を空けて。

「……………私は貴女の様には……………なれないから……………」

苦楽は詰まらなさそうに溜息をつくと窓から空を見上げた。

鉛色の空がどこまでも続いていく。

意識が遠のいていく感覚が頭を過る。

口の中に鉄臭い臭いが一杯になり、唇が真紅の血で濡れた。

目の前の少女が此方を凝視し醜悪な笑みを見せた。

「駄犬」

見た目だけで見た結果そう呟いた、が、血を吐く。

痛い。

痛い。

痛い。

(……『死ねないのが辛いな』)

口の中でそう呟き眼前の敵を捉える。

勿論、何も変わらないが。

ガシユツ。

と果物を握りつぶした時の水分が交じり合ったような音が鳴り響いた。

私はその時、自分の胸を何かで刺されたのだと思っていたがそうではなかった、感覚が麻痺している訳ではない。だが痛みは無かった。

(何だ?)

目の前を凝視すると少女はコンクリートの壁に体を盛大に激突し、ゆっくりとスローモーションの様に落ちる。

横を見ると、そこには居た。

黒髪に黒い瞳、年がら年中着て少し薄汚れたコート、黒いパンツ、

黒いバツシユ。

忘却わすれだった。

右足を上げたまま硬直しているという事はどうやら少女に回し蹴りを放つたらしい、だから少女は跳んだのだろう。細身の癖に力だけはあるから。

少女は地面に突っ伏し口元を押さえる、指の間から血が滲んでいた、あの蹴りだと肋骨辺りが折れていたのかもしれない。

私は無言で少女を凝視する、少女は私を憎悪の目で睨みつけると跳

躍し路地裏から消えていった。

意識が途切れていく。

何も考えられそうに無い。

何も考えたくない。

頭が痛い、腹に空いた風穴から血が噴出して赤絨毯レッドカーペットの様だった、私の血液は温い。

その感覚が嫌で、

その感覚に恋をしそうになった。

この感覚が、

この感覚こそが。

今生きている証なのだろう。

忘却が駆け寄り私を抱いた、俗に言うお姫様抱っこだった。

正直私は忘却が怒ると思っていたが、違った。

忘却は私を抱えた時、そつと微笑んだ。

私にはそれがどうしようもなく、

悲いたかった。

.....

March 22 AM 13:48 (後書き)

すみません、テスト期間中の為更新が遅れますw

「なあ、苦楽さんよー大丈夫なのかい？」

机にグデーツと寝転がったまま俺は魔女である苦楽くらくに問う。

当の本人はソファの上に血塗れになった刹那せつなを運んでいた、意識は無いのだろうがソファに置いた瞬間刹那の顔に苦痛の色が見えた。そして腹に開いた赤黒い風穴を見て嫌悪感と後悔が芽生える。溜息をつきたくなった。

ハア……。

ついてしまった、つかない方が良いのだけれど

「溜息をつくくな馬鹿者、此方の気が滅入る」

「五月蠅なまじい、それより本当に治せるんだろうな？」

「それが人に物を頼む態度か？ ん？」

「わかりました、お願いします。それより苦楽って白魔術を形成できるのか？ 一昔前に聞いた風の噂では黒魔術専門だと聞いていたけど」

俺の問いに苦楽は此方を振り返りキョトンした顔で此方を見た。

「今も昔も専門は黒魔術だが？」

顔を伏せるのをやめて苦楽を見る、妖艶なオーラを纏った苦楽は相変わらずキョトンとした顔を浮かべたままだ。

「じゃあ誰が治すんですか？ 俺黒魔術特化ですよ？」

それを聞いて俺の言いたい事がやっと理解したらしく苦楽さんは「ああ」と大袈裟に相槌を打ってニヤリと冷笑を浮かべる。

「私が治すのでは無い、治すのはアイツだ」

と、言つて苦楽が奥の部屋へと続く扉を指差した。音も立てずに扉がゆっくりと開く。

扉の奥から出てきたのは白いドレスを着た苦楽よりも少し童顔の少

女だった。

髪の色は黒い漆黒のロングヘア、瞳の色は蒼穹。病的に白い肌が何と云うか綺麗だった、大雑把な表現にも聞こえるがその他に言葉が出てこないから仕方が無い。

少女は薄い唇を開く。

「御呼びでしょうか……お姉様」

その言葉に俺の脳内に火花が散る。

と、言うか言葉の意味が良く分からなかった。

オネエサマ？

意味不明なんです。

俺を置いてけぼりにして苦楽と少女が話を続ける。

「伯楽、この子を治してくれないか？ お前ならできるだろ？」

「はい……でも御姉様……何ですかこの子」

「嫉妬の目で私を見るな、ただのお得意様だよ」

「では……この人は？」

少女、伯楽は俺を指差した、何だろっ目が怖い。

苦楽は再び苦笑を浮かべて宥める様に頭を撫でる。

「だから嫉妬の目で見るな、そいつは私の性欲処理に」

「ちよつと待てコラアツ！」

全力で止めに掛かる、小説家になろうではやってはいけなさそうなネタである事は確実なのだから。

苦楽は怪訝そうな顔で俺を見て一言。

「何だ」

「何だじゃねえよッ！ 俺がいつからお前の性欲処理人形になったんだよ、何時だ！言ってみろコラアツ！！」

「お前の童貞を奪った瞬間」

「キツパリと言っな！ トラウマが滲み出る！！」

何と云うか思い出したくない過去が一瞬頭を過ぎった、悪寒で背筋が震え吐き気がする。

「それで、その子……誰なんですか？ 御姉様とかって……」

俺は伯楽を指差して問う、苦楽の情報屋を利用してからまだ数ヶ月しか経ってはいないがこの廃ビルで苦楽以外の者に会うのは初めてだった。

苦楽は暫く無表情で居たがやがてハッと気づいて俺と伯楽に交互に視線を向ける。

「そう言えばまだ紹介してなかったな、伯楽は私と血の繋がった妹だ」

時間が凍結した。

いや、この瞬間少なくとも凍結したのは俺だけだろう。

聞いてはいけない言葉を聴いてしまったのは間違いない、言語機能が麻痺している云々ではなく苦楽が喋った言葉を今の俺には理解する事ができなかった。

数秒耳が痛くなるような静寂が部屋一帯を包み苦楽がゆっくりと口を開く。

「そんなに驚く事か？」

苦笑を浮かべた顔には呆れすら混ざっていた、呆れたいのはこっちだ。

「驚くつて……そりゃ驚くさ、妹が居るなんて聞いてないし」

「私は情報屋だぞ？ タダで情報をホイホイと明け渡す訳が無い、いいかい忘却（やめくわい）、情報屋って言うのは個人情報（こじんじょうほう）は勿論存在自体も隠蔽しつつ仕事をしなければいけないんだ、お前は偶然にも私を誘拐事件から救って偶然にも私の情報商売を頼る様になっただけだ、それ以上それ以前の問題でもない、お前達が誘拐事件に接触しなければ街角ですれ違う程度だったと思うしさ」

そこで苦楽の表情に少し陰りが出る、誘拐事件は惨状だった。

タチの悪い悪魔は次々にあらゆる者を誘拐し凌辱し飽きたら虐殺、そして次の女を捜すの繰り返し。

苦楽は単純に偶然にもその一人に選ばれて凌辱されかけていた所を俺と刹那が気まぐれで特攻し気まぐれで冥界へと送った。

よく考えれば苦楽の言っている事はもっともかもしれない。

俺達が此処に居る理由は所詮偶然に過ぎない。

あの時刹那が悪魔を見つけなければ苦楽は死んでいた。

あの時俺達が助けなかったのなら苦楽は死んでいた。

その場合、俺達は何も知らずに日常を生きていた筈だ。

何だ、偶然とは此処まで恐ろしいものなのか。

神が一瞬でも偶然の糸を狂わせるだけで人が一人死ぬ可能性もある、なんて皮肉。

再び重い沈黙が室内に走り俺は額を押さえる、正直こんな空気は苦手だった。

「……あの」

次に言葉を発したのは伯楽だった。

俺が顔を上げると伯楽はソファの上に寝かされた血塗れの刹那を指差していた。

「……この……」

「ああ、名前は刹那だ」

ギョツとして横たわっていた刹那の方を見る、彼女は虚ろな目で天井を見上げていた。

「刹那、意識が戻ったのか？」

「まあな」

俺の問いに刹那は気ダルそうに答えた。そして伯楽を見上げて苦笑を浮かべる。

「すまないがまだやる事が有るからな、早めに治してもらえないか？」

俺は刹那が真面目に懇願する所を初めて見たような気がした。

いつもは堂々と獅子の様なオーラ（少し言いすぎかもしれないが）を出している刹那がそんな言葉を言う光景は中々レアだった、ビデオカメラ持ってきたらよかった、多分殺されるけど。

刹那の言葉に少女は苦楽に似た微笑を浮かべると右手を翳す。

そこから光の魔力が収縮し、開放。

刹那の腹の風穴に向かって放たれ、同時に閃光。暫くすると風穴は

完全に塞がり痕すらなかった。

「ほー……」

俺は無意識に間の抜けた声を出す、白魔術を使う者は数回見た気がするがここまで完璧な回復系統の魔術を見た事は無かった気がする。真面目に尊敬する。

当の本人は無表情のまま翳した手を戻し苦楽を通り過ぎて俺を見てくる。

「……………終わりましたので」

「え、ああ、ありがとう」

結構簡単に終わった、てつきり姉の苦楽と同じ様に色々払わされる予感がしたのだが妹の方が真面目らしい。

伯楽は「それでは」と丁寧なお辞儀を見せて奥の部屋へと戻っていく。

「なあ、苦楽」

「言いたい事はわかる、皆まで言うな」

「お前らって本当に姉妹か？」

「人語を理解できないのかお前は、まあいい、姉妹だよ、血の繋がった双子、妹は父の遺伝子を受け継いだらしいな蒼穹の瞳と黒髪が父にそっくりだ」

苦楽が自分の白髪はくはつを撫でて苦笑を浮かべた。

「姉妹で凄い差が出るんだな？」

「差？」

「欲求不満で人を襲ったりしないんだなって意味だよ」

「ああ、その事が……言いことを教えてあげようか忘却」

「あん？」

「伯楽は生粋の同性愛主義者だ」

「お前の家の血筋はそんなのばっかりかあっ!!」

廃ビルに絶叫が響く。

March 22 PM 15:48 (後書き)

はい、テスト期間から開放ー、と言う事でまあ載せます、水曜日で
も無いけど載せます、おそらくいけないと思いますがファンの方々お
待たせしました。

後ペンネーム変えました、イエイ (タヒ
心機一転がんばろうかと思えます。

では本編の事を触れておきましょう
伯楽さん、百合要因ですねwww
さて、彼女の濡れ場シーンはあるのかッ!?

……いや、これってそんな小説だったけ?…作者自体も断言できな
いんですが…w

後ひとつ心配なのが、10部まで書いているのに2万文字すら超え
ていない事。

前半が二日に一回更新だったので少なかったのかもしれませんが
これからは大体一週間更新位になるので内容的には厚い(熱い)か
もしれません

それでは、契約のラヴェリタを宜しくお願いします

「と、言うわけだな」

「どう言うわけだ、伏線も何も無かったぞ!? おそらく本編読んでる皆さんポカーンだぞ、ポカーン! 小説読んでポカーンとか凄く致命的なんだぞ!」

「誰だそんな読者が着いていけそうに無い空気にしたのは、先生怒らないから大人しく手を上げろ」

「お前が拳げるよ、諸悪の根源はお前だろうがっ!」

「何を言うかお前も結構楽しんでただろうが」

「眼科行け阿呆」

何時になっても相変わらずだな苦楽はと内心で毒づき安心して刹那と向かい側のソファに座る。

暫く眼を瞑っていたが誰も何も喋らないので瞳を開く、静かだと思つたら刹那が可愛い寝顔で寝ていた。苦楽は部屋の中にある火燵こたつに潜った。

と、言うか何故この家は洋ソファと和こたつが一緒なのが激しく謎だ。

この静寂に耐えられるほど俺は忍耐力は無いので大人しく苦楽に話しかける。

「つか苦楽よお」

「何だ?」

苦楽が火燵から顔を出して俺を見上げる。

「さつきもツツコミしたけどお前の血筋はマジでそんなのばっかりなのか?」

「そんなの?」

首を傾げる。

「だから……その……性癖?」

「嗚呼、その事か、そうだね……私の父親は幼女ロリ愛好家コンで母親は幼シ児愛好家ヨタコンだったよ」

あっさりと放たれた苦楽の言葉に俺はソファから転がり落ちそうになった。

「どうした？」と苦楽が俺を怪訝そうな顔で見ているので俺は脱力した。

「やっぱお前の家の血筋は変態だったんだな、そうなんだな！」

「人が人を好きになるのは当然の事だろう？」

「お前らの家庭の場合それは完全に歪んでるっ！」

「ちなみに忘却が女の子だったら完全に私と伯楽で可愛がってたのだがな」

「涎を垂らして変な妄想に入るな、虫唾が走る」

「存外悪くは無いですか？」

「黙れ、死ね淫売」

「あ、ちなみに妹の好みは刹那位のちっちゃい子だから」

聞こえていたのだろうか、刹那がガバリと起き上がり背筋を震わせながら苦楽を見た。

「……本当なのか？ それ」

刹那の顔面は蒼白だった、先ほどまで血塗れだったから普通の事なのだろうが自分の身の危険を感じたのか血の気が完全に引いていた。一方の苦楽は妖艶な笑みを浮かべながら続ける。

「本当だよ……あの子はねー、結構凄いやー、私の口からでは言えないあんな事やそんな事やら、百合だけど処女喪失しちゃうかもね」

瞬間、世界が凍った。

刹那だけじゃなく俺自体、それ以上に世界が本当に凍った。

百合で処女喪失ってどう言う事だ。

ゆっくりと刹那の方を見ると案の定ガタガタと震えていた、ある意味萌えるかもしれないが今は痛々しい事この上ない。

恐る恐る苦楽に尋ねる。

「苦楽さーんそれって」

「冗談ではないぞ」

……死にたくなつた。

……いや、やっぱこの人等を殺したくなつた。

「まあ、それで」

苦楽が事務机に頬杖をつけて俺を見る。

その眼は真剣そのものだった。

「とりあえず途中経過だけ教えてくれないか？」

途端に苦楽の顔が気だるそうな顔になつた。何故か安心感が滲み出た。

俺は苦楽が寝ているのを確認して一応の事情を全て話した。

苦楽は一瞬苦い顔を浮かべるがすぐに無表情になる。いつもの苦楽の様子とは違っているので思わず「どうした？」と問う。

「いや、その……どこから説明するべきだろうな」

苦楽が頬をポリポリと搔いて事務机の引き出しから薄い桃色のクリアファイルを取り出すとその中から一枚の用紙を取り出す。

「忘却私おまえの情報網を知ってるよな？」

「は？ 知らなかったらお前を頼るわけ無いだろ？」

即答で返す、当たり前だ。

その情報網が必要だから俺は苦楽に頼っているし苦楽も報酬目当てに俺と親しくしている。

俺は苦楽の事は好きでも嫌いでもない、知り合っても顔見知り程度の関係になつていてもおかしくは無いだろう。向こうも俺と同意権のほずだ。

「でもそれがどうかしたのか？」

「それが……まあいい、大人しく聞けよ」

.....

「って……ちょっと待て、それ本気で言っているのか？」

苦楽は黙って頷く。

俺の全身の力が抜けていく感覚が襲い掛かる。

今苦楽が話した事は矛盾点が多すぎる、だが決定的な条件も多すぎる。

結果的に、これが本当だとしたら色々間違っている。

それは俺達の方でもあり。

世界のほうでもある。

「苦楽、この話は」

「分かっているよ、刹那には黙秘だろ？」

「助かる、アイツまた一人で飛び出していくから」

「それにしても何でアイツは今回飛び出したんだ？」

苦楽の質問に俺は聞こえない様に息を吐く。

「俺は情が働くからじゃないですか？ もしその事実が本当だとし

たら大変ですし、むしろ俺はその場では役立たずだったと思うよ、

感情が豊かな悪魔ほど愚かな物は無いしね」

自分でも何を言っているのかよく把握できなかった。

ただ、嫌な予感がする。

頭の奥がキリキリと軋んだ。

March 22 PM 16:10 (後書き)

小説家になるつもりニユールおめでとございませあああああす

ッ！！！！！ (黙)

凄く使いやすくなってマジでビックリですw

と、言うわけでこれからも宜しくお願いしますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7339h/>

契約のラヴェリタ

2010年10月14日23時08分発行